

# ゴルフの旅人

クラブを持てば世界は友だち

第15回

## アイランド・北西部(編)

# 岬の果てのゴルフ場めぐりはフェリー利用が一番だ

取材協力:アイランド政府観光庁  
(www.discoverireland.jp)

Nishimura Kunihiko

1947年生まれ。東京大学卒。弁護士。プレーヤーの立場からゴルフ場再生に取り組んでいる。04年ニューセントアンドリュースGCジャパンのクラチャンに。現在はHC3

### カ

ウンティラウスGCから東海岸を離れ、一路内陸を西北に走る。目指すはスライゴー。詩人イエーツ(1)の故郷だ。ダブリンからは離れた内陸は、緑の宝庫。アイランドには高い山はないが、ひたすら丘が続く。緑の丘に見える黒や白い斑点は羊や牛たち。でも道路の整備はまだ遅れている。街中をはずれると、すれ違いやつとのような道でも時速100キロでOK。すぐ横には民家があっても人はほとんど見かけない。機嫌の悪いナビをだましましたしながら、田舎道を疾走する。

スライゴーのロンスポイント、ドネゴール、ロサベナ、バリーリッフィンと続くアイランド北西部のゴルフ場は、いずれも岬の先端に近いところにあるチャンピオンコースだった。

スライゴーでは、西のゴールウェイから北アイランドのロイヤル・ポートラッシュまでの、リンクス11コースの営業を引き受けているジョ



スライゴーのジョンはアイランド北西部ゴルフ場集客のプロ。ゴルフも本格的だ



ジョンは、勝負どころでこんな長いバットも入れてくる。アイランドはマッチプレーだ



狂い出す。バックナインに入って盛り返すが、ジョンもバーディをとってついでに。庄巻は17番のすばらしい打ち上げホール。距離もあり川奈よりきつい打ち上げもパー・パーで分け、勝負は最終18番でついた。やっぱりアイランドではマッチプレー



スライゴー自慢、岬の先端にある12番グリーン上で。キャディは賢そうな地元の子

ンが待っていた。早速トム・モリスやバットルディ(2)の名前が出てくるスライゴーで、18ホールのマッチプレーの開始。4番から打ち下ろして海に近い下界まで下りると、クリークがいくつもフェアウェイに走り、シヨットも

距離があるはずのドネゴールでは、3人合わせて200歳の元気なお年寄りメンバーと



バリーリッフィンのオールドは、神の作り給いしコースにN・ファルドが手を入れた



グラシュデ・リンクスを付き合ってくれたのは、ギターでプレスリーを歌うシジョン

静寂が訪れる一瞬がある。音は鳥のさえずりと風だけだ。東京の街は夜でも光と騒音振動が絶えない、眠りにくい仕事には欠かせない街。でもそのような環境は、人間を知らぬ間に疲弊させるのではないだろうか。バリーリッフィンのジョンとのマッ

レーだねという、ジョンは、日本で再戦させてくれと悔しがらる。ヤーデージが長いので有名だネゴール(3)はお年寄りのメンバー3人と回ったので、短かった。だが続くロサベナ(4)、バリーリッフィンの36ホールはかなり本格的リンクスだった。特にバリーリッフィンではクラブのスタッフみんなが歓迎してくれ、アマチュアの大きな試合中にもかかわらず、オールドリンクスだけでなく新しいグラシェデ・リンクスも回らせてくれた。



ちも、長めのパーバットが2つ入ってイーブンで終わる。前半の36はうれしかった。オールドコースもニック・ファルドが手を入れて生まれ変わったし、トーナメントにも堪えるコースになっている。グリーンは素直だが、ポイントでは、原設計を生かしながらも難しくしてある。ニック・ファルドは、解説者とコース設計者だけでなく、ゴルフ場オーナーにもなりたいううだ。あちこち買い希望を出して、会員の反発をくらい、島を買ったらしい。

ところで、珠玉のように岬の先に広がるリンクスコース36ホールを踏破し続けたのだが、問題は移動だった。後で聞けば結構フェリーが30分おきに出ていて、これを利用すると移動時間が大幅に短縮できたのだ。それを知らずに岬の海辺を車で行くとは景色がきれいだが、遠回り。激しいシャワーの中、北アイランドのコースウェーホテルという古ホテルに着いたのは夜中の1時であった

注釈:(1)ダブリンにはこの国の文学者たちバーナード・ショー、イエーツのミュージアムも (2)アイランド編第1回で取り上げたジ・ユーロピアン・クラブの設計者・オーナー (3)夏風辺の自然を求めると賑わう小さな町にある、エディ・ハケット設計のコース (4)人里離れた別世界にあるリゾート。トム・モリスらの巨匠のコースと新コースが共存